

2025（令和7）年度  
相模原看護専門学校  
公募推薦・社会人入学試験

**国語**

（試験時間 50 分 配点 100 点）

**注意事項**

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答する途中で、ページの落丁・乱丁や印刷不鮮明の箇所および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験官に知らせてください。
3. HB の黒鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムで完全に消してからマークしてください。
4. 氏名を記入し、番号欄を正しくマークしてください。
5. 試験終了の合図と同時に解答を止め、鉛筆を置いてください。
6. 解答用紙は試験官の指示に従って提出してください。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Aという人物は『源氏物語』<sup>1</sup>を読まないほうがよい。

Bという人物は『源氏物語』をぜひ読むべきだ。

こういう差別はさしあたり読者の前にあるはずがない。みぎのA B二種についていうと、Aのほうがおかしいが、Bのほうがもっとおかしいのではないかと。<sup>2</sup>『源氏物語』を読んだほうがよい読者などというものが現代社会にはじめから存在していると

は考えられない。「何々を読んだほうがよい」という考え方こそ、古典を求道書か、さもなければ受験参考書かにおしこめる<sup>a</sup> **タ**ン緒となるものではなからうか。「はじめに」で述べたように、古典が求道書か受験参考書かに陥没しているのから、いかに脱出させられるかは課題の一つとなる。現代における悩める精神の持ち主は、現代社会に立ち向かうことよってのみ健康になるのでなければならぬ。現代から逃避して、古典によって癒される、と考えるところに<sup>たいはい</sup>頹廢がしのびよる。古典はただ現代に生きてゆくもののためにだいたい人生上の情報を提供してくれるだけである。古典が求道書であってはならない理由だ。

受験科目に「古文」がある以上、例えば、『源氏物語』が受験参考書として利用されることは大いに<sup>b</sup> **結**コウだ。受験参考書にちよūdよいから(出題されるから)『源氏物語』ぐらいは読め、と教える<sup>せんだつ</sup>先達<sup>せんだつ</sup>がいたら、古典にふれるきっかけを作ってくれたという程度に思えばよい。受験参考書は、本人の心が次第で、古典との出会いの書になることだろう。

多忙であるか、あるいは現代に充足している人は、それなら古典を読まなくてもよいのか。否、それはちがう。だが、現代に充足していたり、多忙であったりする人こそ古典を読むべきだ、というよく行われる意見もおかしい。そのような意見は、古典文学をどうという人が読んだらよいかをきめつけている点で、やはり誤っている。古典文学は現代に対する<sup>c</sup> **ケ**イ告<sup>c</sup>を発するものではない、と心得るべきだろう。

「古典文学を読まないほうがよい人」など、はじめからいるわけがないことは、以上に説いたとおりである。

しかし古典文学のほうが、読者を受けいれてくれない、ということはないのか。これが現代の読者の最も心配となるところだ。

古典のほうがわれわれに向かって心をひらいてくれない、ということがあるとしたら、その古典文学は泣きたくなるほど難解なものとして現代人の目に映るのにちがいない。

忘れてならないことは、古典文学と現代の読者とはまったく対等の関係で向きあっている、ということである。

<sup>3</sup> 古典文学を読むことの本性は、対話だ、ということを知れぐれも忘れてはならない。

現代生活のなかで、どういうときに対話を失うかを考えてみれば、古典文学とのつきあい方がすぐにわかってくる。

相手と話をすすめるのに、「私はあなたと考えがちがうのだから」という前提を持ちだすと、対話は成り立たなくなることだろう。相手は心をとざし、意思の疎通を欠いてしまうことであろう。古典文学とのつきあい方においてもまったく同じことがいえる。

『源氏物語』を読むのに、例えば、「『源氏物語』では、われわれ現代人の時代とちがって、恋愛が自由であった」という考えをいじめて読みはじめたでしょう。光源氏が、多くの女性関係を持っている。その女性関係は同時並行的に行われているらしいと考えたとする。そして、「昔は今とちがっていたから、このような文学が書かれたのだ」と理解する。そのような理解を先立って『源氏物語』を読む。——こういう読み方がいちばんまずいのである。これでは対話が成り立たなくなる。読んでも読んでも『源氏物語』は心をひらいてくれない。

「昔」が「今」とちがうのはあたりまえである。そのちがいを固定してかかったら対話にならない。相手は<sup>5</sup> 通り一ぺんの情報や、うその情報を教えてくれても、真実の、精神的な情報は何一つ、もたらしてくれない。

「昔」と「今」とのちがいを超えて、われわれのうちなる感性に向かつて眠りをさましてくれるような情報をこそ古典の世界に期待しているのだ。

古典文学を読むことは見ぬ世の友人たちとの対話である。「見ぬ世の友」がまことの友であるならば、心と心との対話が<sup>d</sup> できることなく交わされる。対話は原則的に一対一としてある。

だが友達という存在は、つねに一対一でいなければならないはずのものでもない。古典文学を読むのに、<sup>6</sup> 読書会や、研究会や、講習会で読むことのなかに対話がない、ということはいえない。

読書会や、研究会や、講習会で読むことの長所は正確に二つある。一つは、知識が外へひらかれてゆくかたちをとることで、知的な広がりがある。『源氏物語』の読みを深くする。読書会や、研究会や、講習会はそういう広がりがあるが動きをする。

書会は、広範囲に、職場でも、学校でも、民間塾でも行われていて、多くの場合『源氏物語』の外側へいったん出てゆき、別の平安時代の女性作品を読みあさるような動きを示す。知的な活動はそういう広がる動きをつづけることで、停滞化を避けようというのがごく自然なことであった。

もう一つは、読書会や、研究会や、講習会のメンバーによる互いのチェックが行われるから、基礎的段階での読み誤りや知識の不足が減少される。もし、<sup>7</sup>生半可な理解をしてきたとしたら、読書会や、研究会や、講習会のなかで大いに気づかされるのがよい。納得できるまで繰り返して質問を発することで、読み誤りを正し、知識の不足から一歩踏みだす。読書会や、研究会や、講習会の効用ははかりしれないものがあるといつてよい。

「昔」と「今」とのあいだに大いにちがいが横たわっていることは当然なのだ。そのちがいを知り、それを超えることが難関なのだから、読書会や、研究会や、講習会は、互いに知識を出しあうことでそこを超えようとする。

古典文学との対話は、おおぜいで読むことのなかにみぎのような長所を持つにしろ、対話である以上、つまるところは一対一であるから、もしそのような二つの条件、知的な広がりから退転しないことと、つねに「昔」と「今」とのちがいに心を砕いていることを把握しつづけることができるならば、一人で読むことに何の支障があるうか。

私は、読書というものは孤独の作業であるから、一人で読むことができるのなら一人で読むのにこしたことはない、と、言おうとしていたのではない。本書における私のねらいはあくまで正しく、古典文学を読む方法を考えることである。一人で読む読書は、古典文学の場合、ひとり合点になるのではないかということに率直に恐れる。自分の好みにあわせるかのように読みすすめて、一向に知的広がりを持たない、という読み方におちいる危険がある。危険どころか、従来の古典文学の読み方は、それを危険と思わず、むしろそれをよしとし、<sup>8</sup>奨めてきた傾向になかったか。それでは好みそのものを変革することが行われない。知的な広がりによって自分の好みの領域を変革することが古典文学を読む大きな目標であることを、一人の読書だとなかなか気づかない。

「昔」と「今」とのあいだにひらいているちがいをちがいとして気づかないというのも一人の読書の場合の短所だろう。「昔」と「今」とでは恋愛の方法にたしかに大きなちがいがある。そのちがいは知らなくてはならない。だから、「源氏物語の時代は、われわれ現代人の時代とちがって、恋愛が自由であった」などと、言つてすましてはならないのだ。どういうちがいであったかをいわないきめつけは、ちがいをちがいとして気づいていないのに等しい。恋愛ぐらい重要な、古典文学を読むうえで最大の課題

となりうる対象を、<sup>e</sup>ソ雑な思いこみでかたづけしてしまうようであつては、ほかのもつとささやかな「昔」と「今」とのちがいを、ほとんど気づかれないのにちがいない。

みぎのような不利を克服しようと意志する姿勢においてのみ、<sup>9</sup>正しい古典文学の読書は成り立つ。一千年も前に書かれた、われわれの時代と別の時代の、別の生活の作品たちを、正しい意味でわれわれのかけがえのない友達に選ぶためには、それなりの努力を怠るべきでないことを知ろう。

(藤井貞和『古典の読み方』より)

問一 傍線 a ～ e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a 〓  ・ b 〓  ・ c 〓  ・ d 〓  ・ e 〓  。

a  
タン緒

④ ③ ② ①

④ 木がタン化する。  
③ 本質をタン究する。  
② 一タンを担う。  
① タン願書を出す。

b  
結コウ

④ ③ ② ①

④ 理論をコウ築する。  
③ 雑誌をコウ読する。  
② ビルを施コウする。  
① コウ和に合意する。

c  
ケイ告

④ ③ ② ①

④ 上役をケイ遠する。  
③ 要人をケイ護する。  
② ケイ賀の至りです。  
① ケイ事事件として立件される。

d  
ツきる

④ ③ ② ①

④ フ随した案を出す。  
③ トツ出した成果だ。  
② 駅に到チャクする。  
① 復興にジン力する。

e  
ソ雑

④ ③ ② ①

④ ソ石を積み上げる。  
③ 過ソ地を調べる。  
② ソ品を用意する。  
① ソ朴な味わいだ。

問二 傍線1『源氏物語』の作者はだれか。次から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 6。

- ① 和泉式部                      ② 清少納言                      ③ 右大将道綱の母                      ④ 紫式部

問三 傍線2「『源氏物語』を読んだほうがよい読者などというものが現代社会にはじめから存在しているとは考えられない」

理由を説明しているものとして最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 7。

- ① 古典を、求道書か受験参考書におしこめるきっかけとなるものだから。  
② 現代的な悩みは現代社会に立ち向かうことで健康にならなければいけないから。  
③ 現代から逃避して古典によって癒されると考えるところに頹廢がしのびよるから。  
④ 古典はただ現代人のためにだいたいな人生上の情報を提供してくれるだけだから。

問四 傍線3「古典文学を読むことの本性は、対話だ」を説明しているものとして最も適切なものを一つ選び、記号をマークし

なさい。解答番号は 8。

- ① まことの友として心と心で語り合うこと。  
② 見ぬ世の友と以心伝心できること。  
③ 「昔」と「今」のちがいを固定しないこと。  
④ 自分と相手のちがいを理解し合うこと。

問五 傍線4「自由」を使って四字熟語を作るとき、ふさわしくないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 9。

- ① 自在                      ② 意志                      ③ 制度                      ④ 奔放

問六 傍線5「通り一ぺん」の意味として最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 10。

- ① 通俗的
- ② 皮相的
- ③ 日常的
- ④ 享樂的

問七 傍線6「読書会や、研究会や、講習会で読むこと」の長所としてふさわしくないものを一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は 11。

- ① 基礎的段階での読み取りや知識の不足をカバーしてもらえること。
- ② 知識が外へひらかれて知的な広がりがあるが作品の読みを深くすること。
- ③ おおぜいで読むことでの確かなアドバイスをもらえるので長く続けられること。
- ④ 同時代の別の作品も読みあさるようになり広がりがあること。

問八 傍線7「生半可」に意味が一番近い四字熟語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 12。

- ① 半信半疑
- ② 疑心暗鬼
- ③ 用意周到
- ④ 中途半端

問九 傍線8「それ」が指すものとして最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 13。

- ① ひとり合点
- ② 従来の読み方
- ③ 一人で読む読書
- ④ 知的広がりをもたないこと

問十 傍線9「正しい、古典文学の読書」について、筆者が本文全体で述べていないものを一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は 14

- ① 筆者は古典を心と心の対話がつきることのないかけがえのない友達だと思っている。
- ② 筆者は現代社会において、古典を読む意義を温故知新の中にあると捉えている。
- ③ 筆者は受験参考書が古典にふれるきっかけになることを好ましく考えている。
- ④ 筆者は複数の人間が共同作業として古典を読むことに意義を感じている。

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「えっ？それを東京からかついできたのか？」

白石は目を丸くして勇と防具入れを見比べた。朝会った少女とそっくりな大きな目をしていた。

「1 ああ。借りたやつじゃしっくりこないと思ってな」

「だけど、そんなもの持ってきてどうするつもりなんだ？」

「どうするって、こっちの連中と試合をするためさ。古武道も盛んだし竹刀を持ってやってこいと、おまえはいついていたじゃないか」

「おれ、そんなこといったか？」

「いったさ、だからおれはここにいるんじゃないか」

勇の言葉に白石はさらに目を大きくした。勇も負けずに目を剝いた。

二人は県立泉ヶ丘高校いずみがおかの校門を入った先にある、古い校舎の昇降口に佇んで見つめ合っている。先に視線を落としたのは白石の方だった。少し伸びはじめたおはぎのような坊主頭を振っている。

「そういうつもりでいったんじゃないんだ。ただ、こっちの様子を知らせるつもりでいっただけなんだ」

「ここの剣道部と試合ができないというのか」

a **フ**ン然として勇は語気を強めた。答えるかわりに白石は弱々しく頭を振って白眼の多い目を上げた。

「今夜はうちに泊まっていけよ」

「いや、もう民宿を借りた。な、どうなんだよ、おまえのいついていた心極流しんごくだの無外流むがいだのという古武術の見学けんがくもどうなるんだよ」

自分の唇があからさまに尖っているのを感じながら勇は小粒の唾をとばした。これまでに使った費用が頭の中で b **ウズ**を巻いた。

白石君、と呼ぶ声をして二人は同時に横を向いた。髪かみの短い強い目をした女生徒が白石をまっすぐに見つめていた。とたんに白石の青白い頬が痙攣けいれん気味に上気した。

「朝稽古、どうしてこんけんて」

「すみません」

弁解をせずに白石はいきなり頭を下げた。

「これからどんどん寒くなれんよ。これくらいで音をあげると寒稽古のときにはついていけなくなれんし」  
「すみません」

白石は頭を下げたままあやまった。頬はいつそう赤くなっている。女生徒は勇に目を向けた。形のよい濃い眉毛の下にある瞳は、<sup>ア</sup>はるかな奥行きを感じさせて、冷え冷えと輝いている。

直視されて勇は軽く頭を下げた。<sup>イ</sup>女生徒の睫毛は凍りついたように動かない。

「うちの生徒じゃないわね」

女教師のような口調でいう。それが不思議に似合っている。違います、と答えてから勇は白石がなにがしかの解説を加えてくれるのを待った。だが、<sup>ウ</sup>白石は小便をこらえる幼児のようにもじもじとしている。仕方なく勇は自分は東京から来た者で、かつて白石が在籍していた高校の剣道部の主将をしており、北陸全域に轟いた<sup>トウ</sup>こちらの剣道部の方と是非手合わせをしたい、と最後は切り口上でいってしまった。

女生徒は黙って勇を見つめ返した。<sup>エ</sup>氷原のような目の白い部分に桃色の点が浮き上がり、黒い瞳の中に吸い込まれていく。不思議な灯りだ、と思いつながら勇は<sup>シ</sup>トウ酔感を抱いて女生徒の目に見入っていた。ふいに彼女の瞳が海草のような揺れをみせた。

「きかんねえ」

眩くようにいって視線を庭に向けた。暖風にあてられたようなおだやかな色が女生徒の目のふちに滲んでいた。

「まるで武者修行やね」

「そのつもりで来たんです」

<sup>2</sup>女生徒の目に憂いが浮かんだ。なぜだか勇は胸に痛みを感じた。

「試合は部長の許可がないとできないけど、見学だけならいいんじゃない。白石君、あとで案内してあげなさい」

そういうと、女生徒は勇に横顔を向けたまま立ち去っていった。見学か、と勇はがっかりした声でいった。そうして、制服のスカートの裾を膝で蹴り上げるようにして歩いていく女生徒の後ろ姿をぼんやりと見送った。

(中略)

昼食後すぐに始められたせいか、体育館での剣道部の稽古は、どこか動きが緩慢だった。<sup>3</sup> 勇は下座に稽古着をつけて控えていた。指名されたら竹刀を交えるつもりで防具を前に置いているのだが、なかなか声がかからない。

副主将の西山にしやまという人に稽古の前に挨拶をしておいたが、相手のそっけない態度がそのまま他の部員に伝染してしまったように、勇は味気ない気分で座っていた。

福井という三年生の女生徒は、四人いる女子部員を相手に稽古をつけている。太刀筋に切れがあり、踏み込みも速く鋭い。二人ばかりいる男子部員の中に置いて、その剣さばきは光っている。

稽古が始められて二十分程たつと、新たに体育館に入ってきた者がいて、<sup>4</sup> それを合図に部員は稽古を中断し整列をして挨拶をした。

遅れてきた学生は肩幅が広く、頑丈そうな顔をした男で、年末に行なわれる県の剣道大会の打ち合わせにいつてきたと説明しだした。話の内容で、彼が主将だと分かった。勇は稽古が再開されるとすかさず彼のところに行つて見学者としての挨拶を行なった。

笑顔で迎えてくれた大林おおばしという主将は、勇の心意気を見事にくんでくれて、稽古に参加するように勧めてくれた。勇は大喜びで相稽古を شدした。

古い体育館に部員の声が響き渡った。勇は続けて五人の相手をしてから面をはずして汗を拭った。二番目に竹刀を交えた二年生が隣で同じように手拭いを使いながら、強いですね、とほとほとあきれた面持ちでいった。相稽古は正式な試合と違い、どちらが一本取ったというような主張をしないし審判をする者もない。お互い勝手に打ち合っている。それでも、段の違いは明らかになる。

「五本に一本しか取れなかった。何段ですか？」

「二段です」

正直に勇は答えた。三段の昇段審査は翌年の五月に予定されている。相手は勇の答えを聞いて、やっぱりなあと無邪気に感心している。人の好きそうな彼の横顔を見て、たとえ五本に一本でも相手に技を取らせてあげてよかったと思直した。相手の竹刀を自分の防具に触れさせずに稽古を終えることもできたのだが、試合ではないし、<sup>5</sup> それでは礼を失することになると考えたからだ。

体育館の天井には剥き出しの鉄骨のハリが横に渡されている。見上げていると主将の大林がやってきて、<sup>d</sup> 老キユウ化しているでしょう、とごつい顔には不釣合な小さな目を細めて笑った。

「うちの高校のやつもこんな感じですよ」

「でも校舎がちよっこしちごうやる。ここのは物置みたいで、いかにも田舎の学校という感じやしね」

校舎は古い鉄筋建てだったが、周囲が畑に囲まれているので勇はひどく、<sup>6</sup> 牧歌的なものを感じていた。香林坊こうりんぼうからバスに乗って街の中を通ってきたのだが、川を渡って数分すると住宅と冬枯れの畑が交互に現われてきたので、勇の胸にやっと地方の都市に來たのだという実感が湧いてきた。それは妙に懐かしく、あたたかい感じを誘った思いだった。

「でも、何年か後には四階建ての校舎を建てるといつとるけど」

「そんなに必要なんですか？」

「さあ、わしらがピークだと思っやけど……」

それから大林は勇を促して体育館の中央に進み出た。部員の多くが竹刀をとめて二人の相稽古を眺めだした。

大林の剣は<sup>7</sup> けれん味の無い素直な太刀筋で、相手がかわることなど少しも疑うことのないように、まっすぐに打ち込んでくる。鏢つばせ迫り合いになっても押し込むようなことをせず、勇が体をかわずと、やっと自分のやることに気付いたように、後ろに下がって面を打ち出してきた。勇は注意深く、三本に一本は相手に与えるようにした。

稽古を終え、体育館の外にある洗い場で足を洗う頃には、勇はすっかり泉ヶ丘高校の剣道部員の一員になったように打ち解けていた。勇と稽古をした者たちは口々に、勇の剣筋の強さと足さばきの<sup>e</sup> タクみさを誉めそやした。

「三メートル向こうにおると思ったら、まばたきする間に前に来とれんし、まいったぞやー。本当にわしと同じ二段なんかいや」  
大林がおどけた調子でいうと、勢いを得た白石が、まだ不慣れな金沢弁を交えて勇の正体を明かしてしまった。

「そりやそうや。だって小林はこの間の浜松はまつのインターハイで都代表で出場して準決勝までいったんやし、強いのは当たり前や  
って」

部員の動きがそのひと言で時の中で停止したようになった。勇はみんなの気持ちに砂を溶かしたような不快なものが混じるのを  
恐れて、あわてて古武道の話題を持ち出した。是非一度習ってみたいと口にした。その試みは成功したようだった。気持ちのな  
ごんだ部員の一人の口から、鎖鎌くさりがまはどうだ、という言葉が発せられたからである。

背中に浮いた冷汗を手拭いでしごきながら、<sup>8</sup>勇は白石を睨みつけ、その無邪気さを腹の中で呪った。

(高橋三千綱『金沢、斜め雪』より)

問一 傍線 a ～ e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a ㉡ 15 ・ b ㉡ 16 ・ c ㉡ 17 ・ d ㉡ 18 ・ e ㉡ 19 。

a  
フン然

15

① 知らせにフン慨する。  
② 火山がフン火する。  
③ 活躍に興フンする。  
④ 古フンを調べる。

b  
ウズ

16

① 大手の傘力に入る。  
② 事件の力中にある。  
③ コロナ力が収まる。  
④ 力失の罪に問われる。

c  
トウ酔

17

① 自然トウ汰  
② トウ竜門  
③ 不偏不トウ  
④ トウ磁器

d  
老キユウ

18

① 不キユウの名作。  
② キユウ極的な理論だ。  
③ 物資が困キユウしている。  
④ キユウ姓を尋ねる。

e  
タクみ

19

① 薬のコウ能を調べる。  
② コウ妙な手法だ。  
③ 絶コウのチャンスだ。  
④ コウ名心にはやる。

問二 傍線1「ああ。借りたやつじゃしくりこないと思ってな」にふさわしい気持ちを表す四字熟語を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 傍若無人      ② 意気軒高      ③ 泰然自若      ④ 天真爛漫

問三 傍線ア・イ・ウ・エの中で、直喩表現を使っていないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① ア      ② イ      ③ ウ      ④ エ

問四 傍線2「女生徒の目に憂いが浮かんだ」のはなぜか。ふさわしくないものを一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は 。

- ① 勇の気持ちの強さを理解できたため。  
② 勇が遠路東京からやって来たため。  
③ 白石が朝稽古に来なかったため。  
④ 無断の対外試合は禁じられているため。

問五 傍線3「勇は下座に稽古着をつけて控えていた」について、この時の心情として最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 。

- ① 部員たちの動きに注意をはらいながら、控え目な態度を保っている。  
② 自分の存在感を見せつけながら、いつ声がかかるのを待っている。  
③ 強豪校とは名ばかりだと見下しつつ、主将が戻って来るのを待っている。  
④ 部外者として謙虚に礼節を示しつつ、満を持している。

問六 傍線4「それを合図に部員は稽古を中断し整列をして挨拶をした」について、ここから読み取れることの中で最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。 解答番号は 。

- ① 次の大会の対戦相手が決まったので、早く知りたい気持ちを読み取れる。
- ② 稽古は二十分のサイクルで中断される習わしであることが読み取れる。
- ③ 剣道の強豪校らしい統率のとれた部員の動きが読み取れる。
- ④ 主将が剣道部の中心的存在で、その尊大さが読み取れる。

問七 傍線5「それでは礼を失することになると考えたからだ」について、この時の心情を推測して最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。 解答番号は 。

- ① 剣道は礼に始まり礼に終わる武道なので、部外者である勇は、その精神を徹底させることに心血を注いだ。
- ② 部外者である勇を稽古に受け入れてくれたので、実力の差を徹底的に見せつけないように気を配った。
- ③ 正式な試合ではないので、勇が適度に力を抜くことによって、相手と互角に渡り合えるように配慮した。
- ④ 勇と二番目に竹刀を交えた二年生は、かなり格下であったため、それに合わせた太刀筋を心がけた。

問八 傍線6「牧歌的なものを感じていた」について、ここでの勇の心情に最も近い外来語を一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は 。

- ① ノスタルジー
- ② エコロジ
- ③ サイコロジ
- ④ アナロジ

問九 傍線7「けれん味の無い」を四字熟語で表すとき、最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。

解答番号は  。

- ① 行雲流水      ② 正々堂々      ③ 千差万別      ④ 質実剛健

問十 傍線8「勇は白石を睨みつけ、その無邪気さを腹の中で呪った。」について、この時の勇の心の中の思いを説明する文としてふさわしくないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は  。

- ① 強豪校の主将のプライドを傷つけないように慎重に打ち合ったのに、白石が勇の戦歴を口走ってしまったことに対する怒り。
- ② せっかく剣道部員の一人になったように打ち解けたのに、白石が勇の正体を明かしてしまったことに対する嫌悪感。
- ③ 主将の大林が勇の強さを認めたこと便乗した白石が、不慣れな金沢弁で話し始めた言葉遣いの稚拙さに対する不快感。
- ④ 白石が勇の戦績を口走ったことによって部内の空気が一変したので、勇があわてて古武道に話題をすり替えたことの結果。